

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-3

7年ぶりに故郷で新年を迎えた真紀は、午前一時過ぎに自分の部屋に戻った。

酒には強い彼女が珍しく酔っていた。

ベッドに入っても目が冴えて、寝付かれないでいた。

幕を下ろしたはずである画家との愛憎劇の残滓が、女の心底で未だに熾火のごとく執拗に熾っていた。

真紀は知らず知らずの内に夭折した母の登紀子が歌ってくれた寝させ唄を頭の中でリフレインしていた。

村山地方の子守歌

ねろねろや おんねろねろや

ねむると ねずみに まんじゅうもろう

起きると おぎづに さらわれる

ねろねろ ねろねろ ねろねろやー

眠りがゆっくりと沈子のようにおりていって、真紀は夢を見ていた。

父と二人で月山の山頂を蛇行して流れる月の川を俯瞰していた。

月の光が川のように流れているせいで、瀬音はしない。異域の超自然現象を、月の川にかかる虹の端に腰かけて目を瞠っている10歳の頃の自分を、夢の中で夢を見ている真紀は懐かしんでいた。

「お前が小学校4年の時に仙台の映画館で見た『ティファニーで朝食を』の中でオードリー・ヘップバーンがギターを弾いて歌っていた“ムーンリバー”はこの川なんだよ」と父は月光川に目を細めて諭すように話したが、視線は現実には結ばれていないで、空白の時間を彷徨っていた。

「Moon River は心の深い所に流れる望郷の川ではありませんか」と真紀は父との途切れた時間や距離を埋める想いで問いかけた。

「お前は誰だ？私の娘なんかじゃない！」と突然叫んで態度を豹変させた父は、後ずさりを始めると踵を返して1マイル以上もある大きく広い月の川に光の翼を広げて飛翔した。

「お父さん！お父さん！私を置いていかないで……」と娘は必死で呼びかけるが、声になってくれない歯がゆさに喘いで口パクを何度となく繰り返した。

声にならない声が言葉に変換した時点で、真紀は残夢から解放された。

無性に喉の渇きを覚えた真紀は、薄明りを頼りに階下の台所まで行くと、冷蔵庫から500mlのビール缶を取り出しプルタブを引いて、喉の鳴るままに貪り飲んだ。

飲みかけの缶ともう一缶を抱えて自室に戻った真紀は、窓を開けて北国の冬の寒さに身震いすると、「お父さん、新年あけましておめでとう。乾杯しましょう」と月山に向けてビール缶を捧げ持ちながら独り言ちる。

注 山形県の最北部にある遊佐町を流れ日本海にそそぐ『月光川』と呼ぶ川がある。